

エゾリスくんの ゆうびんはいたつ

にじいろ
~虹色のまほう~

ぶん みたに の あ え
文・三谷 乃 垂 絵・ねこのうみ ちひろ

エゾリスくんの
ゆうびんはいたつ

～^{にじいろ}虹色のまほう～



あき ふか
秋も深まってきたある日のこと

エゾリスくんのいえに、

シマリスくんがたずねてきました。

「やあ、どうしたんだい？」

「やあ、実はきみに頼みがあるんだ」



「きみも知っているとおり、ぼくは郵便屋なわけだけど」

シマリスくんはここで言葉を区切り、目をこすりました。

「ぼく、そろそろ冬眠しなくちゃいけない。

だから、ずっと起きてられるきみに、

冬の間だけ配達をお願いしたいんだ」

「ええっ、ぼくがかい」

エゾリスくんはびっくりしました。

ですが、今にも眠ってしまいそうなシマリスくんを見ると

不思議とやってみようと思えました。



つめ ころが
冷たい木枯らしがふくなか

エゾリスくんは、シマリスくんから預かったカバンを肩にかけ

ちず かたて もり はし はし
地図を片手に森じゅうを走り始めました。

「あれっ、エゾリスくん、どうしたの？」

「お休み中のシマリスくんの代わりなんだ」

「そうなのね。お疲れさま！」

こうした会話も、楽しみのひとつになりました。



はいたつ な
配達も慣れてきたころ

エゾリスくんは、いつもの調子ちょうしでドアをたたきました。

「ごめんください」

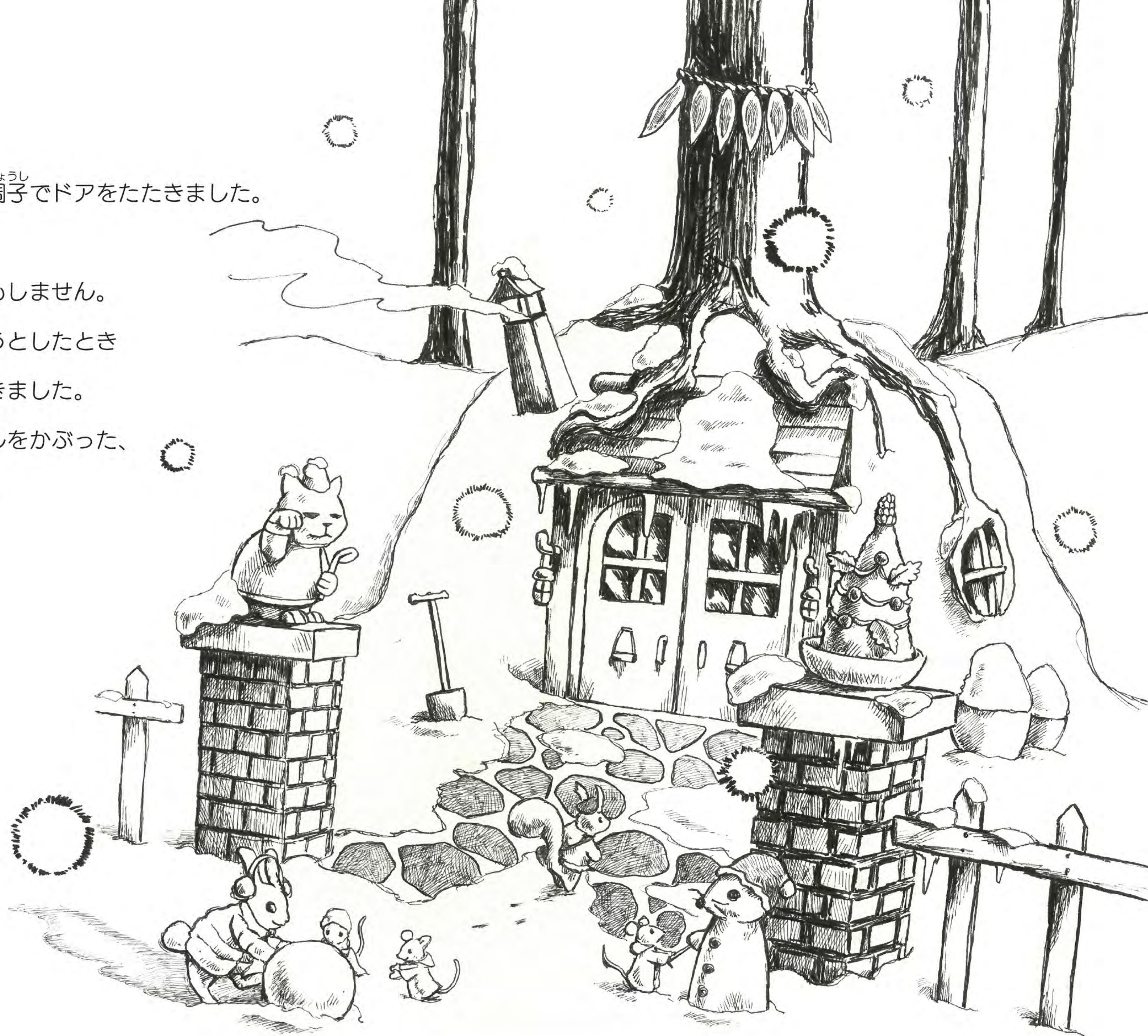
しかし、家からは声こえも物音ものおともしません。

留守るすなのかな、と立ち去ろうとしたとき

ドアがギイとおとおと音をたてて開ひらきました。

そこには、虹色にじいろの長いながベールをかぶった、

キツネが立たっていたのです。



「こ、こんにちは……おっ、お手紙^{てがみ}を届け^{とど}に来^きました」

エゾリスくんは、ドキドキしながら手紙^{てがみ}を差し出^さしました。

キツネはエゾリスくんを頭^{あたま}からつま先^{さき}まで見^みたあと、

口^{くち}を開^{ひら}きました。

「こんな寒^{さむ}いのに、ごくろうさま。配達^{はいたつ}は慣^なれたかい？」

「え？ なんでぼくが始め^{はじ}めたてな^しのを知^しってるの？」

「わたしは物知^{ものし}りだからね……そうだ」

キツネは、腰^{こし}に下げ^さた袋^{ふくろ}から、

ドングリ^{かたて}を片手^{かたて}いっぱい^とに取り出^だしました。

「きみのがんばりをたたえて、これをあげよう。

お昼^{ひる}ご飯^{はん}の足^たしにでもしたらいい」

「わあ、ありがとう！」

さっきまでのドキドキはどこへやら

エゾリスくんは大喜^{おおよろこ}びで受け取^うりました。



ま ま ひる じ かん
待ちに待ったお昼の時間

エゾリスくんは、もらったドングリを食べて驚きました。

こんなにおいしいドングリは初めてだ！

しかし、なんだかひとりで食べるのがもったいなくなりました。

「そうだ。土に埋めて、春がきたらシマリスくんと一緒に食べよう」

そうして木陰に穴を掘り、

だれ 誰にもわからぬよう、きれいに隠したのです。



つきひ ^{なが} はる
月日は流れ、春がやってきました。

ねむ ^さ
眠りから覚めたシマリスくんが、エゾリスくんの ^{いえ たず} 家を訪ねると

エゾリスくんは ^{いきようよう} 意気揚々と、^{かく ばしょ あんない} 隠し場所へ案内しました。

しかし、ていねいに ^{かく} 隠しすぎたのでしょうか

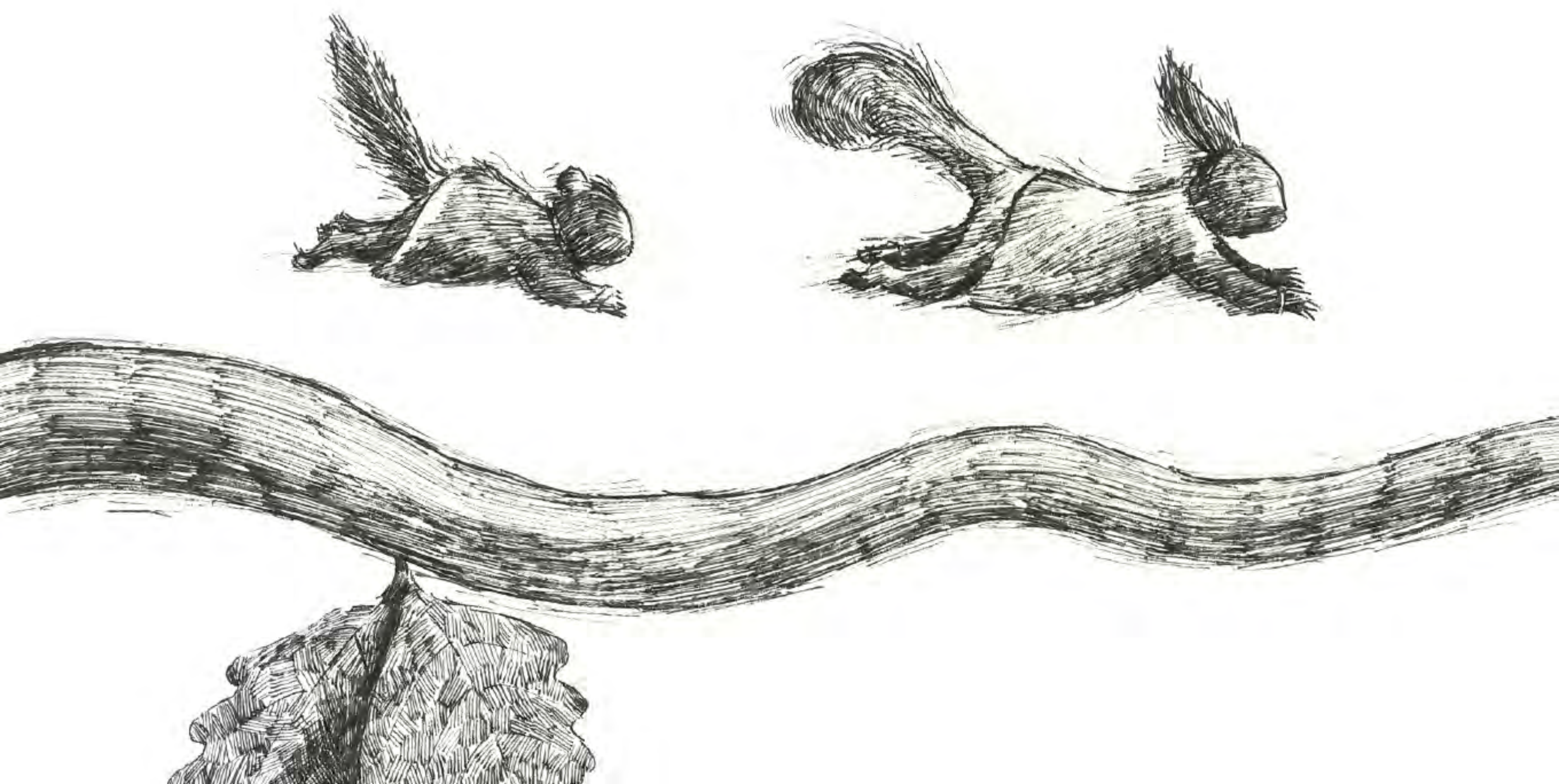
どこに ^う 埋めたのが ^{まった} 全くわからないのです。

「ごめんね。おいしいドングリを ^た きみと食べたかったんだけど」

「ううん、その ^{きも} 気持ちだけでもうれしいよ」

そう ^い 言って、ふたりは ^{だ あ} 抱き合いました。

すると、^{き うし} 木の後ろから ^{おお かげ} 大きな影が ^で 出てきました。



「ああっ、ドンダリのお兄さん！」

今日はベールを首元に巻いたキツネが、クスリと笑いました。

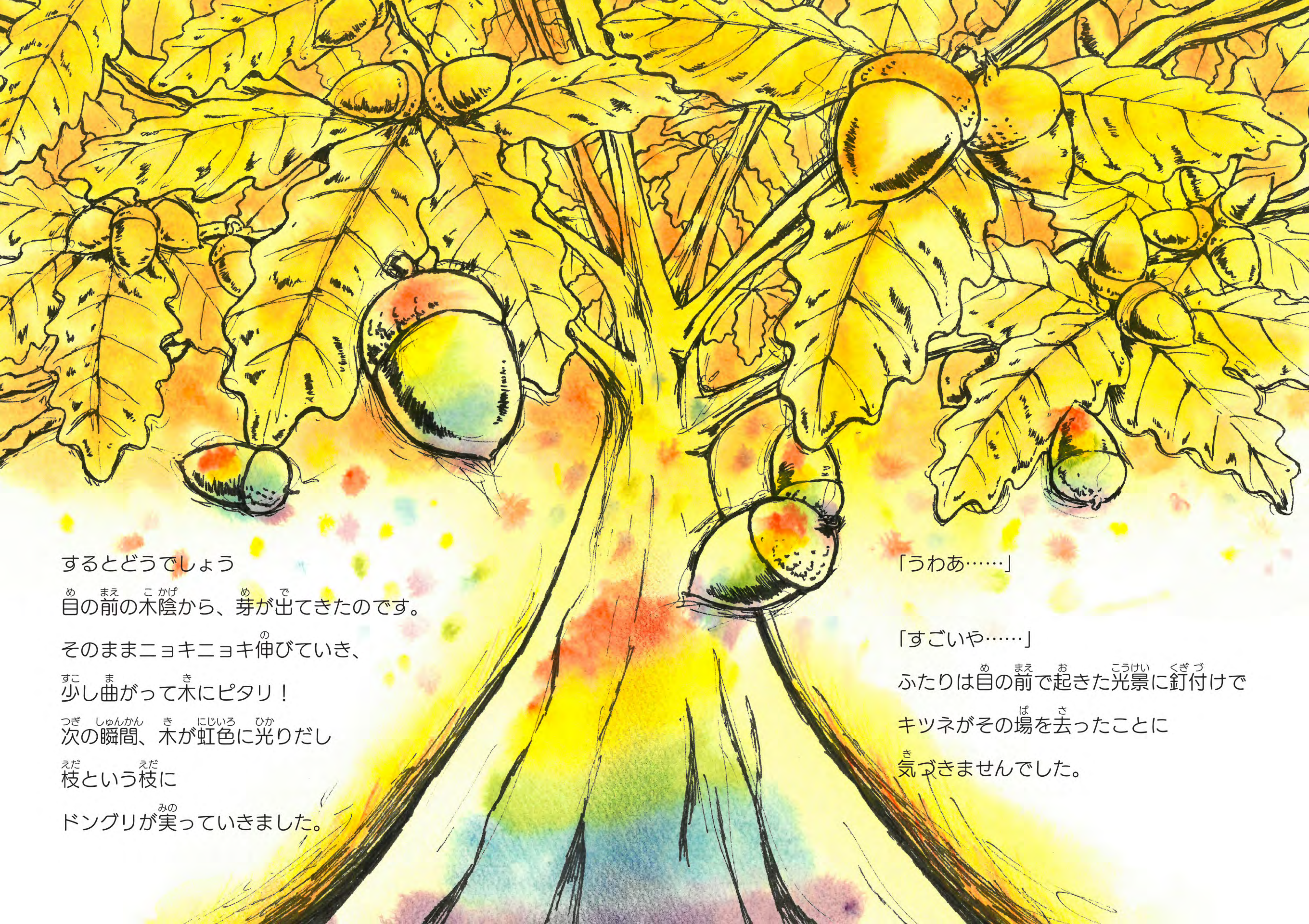
「探し物をしているんだろう？」

「どうしてそれを？」

「私は物知りだからね……そして、魔法使いなのさ」

そう言って、杖をサッと振り上げました。





するとどうでしょう

目の前の木陰から、芽が出てきたのです。

そのままニヨキニヨキ伸びていき、

少し曲がって木にピタリ！

次の瞬間、木が虹色に光りだし

枝という枝に

ドングリが実っていました。

「うわあ……」

「すごいや……」

ふたりは目の前で起きた光景に釘付けで

キツネがその場を去ったことに

気づきませんでした。

その日のお昼

ひろばには、森の住民たちが集まっていた。

ふたりは、こんなに食べきれないからと

みんなを呼んでパーティーをすることにしました。

春の訪れを盛大にお祝いする、

それはそれは、楽しいパーティーだったそうですよ。



「キツネさん、どこ行^いっちゃったんだろうね」
「今^{こんど}度、また誘^{さそ}ってみようよ！」



